

短歌

小松文芸賞

移ろひの間に

園町 浅野 真智子

干からびて色沈みゆくかなぶんの地に還らむ時までの影

眠られぬ夜をひと粒の眠剤に雨音はいつか大河とうねる

吾が包む手は現身の母のもの点滴を打つ薄き手の甲

保育器の赤児を見つむる母の目のつかのま優しき光を宿す

絶え間なく生と死はあり病室の窓にふはりと浮くひつじ雲

選評

永井正子

今年の応募は十七編、偶然だが昨年と同数であり、関東在住の二人の作品もある。過去の「小松文芸賞」受賞者の投稿も続き、短歌欄の高レベルを保っている。

小松文芸賞は浅野真智子作品「移ろひの間に」を推薦したい。一連は時の推移に身を置く自身を歌ったものだが、明と暗、生と死に関わらざるを得ない日常の鬱屈とした気分が流れている。死んだかなぶんの土に還るさま、眠剤に頼る入眠の瞬間的な違和感も巧み。晩年を病む母への労りと、内深く潜むその母性愛に触れた四首目。最後に救いのような一首を置くなど、一連は序破急の構成ながら、言葉を惜しむような手法に心がこもる。

いつも言うことだが、感銘とは歌われた事実そのものが消え、何かが静かに胸に残る作品のことで、秀歌は沈黙に通うものがある。